

ピューリタン家族の「多産」を 取り巻く諸要因

——アメリカ植民地期ニューイングランドにおける結婚とコミュニティの観点から——

篠 原 明

キーワード：ピューリタン家族 植民地期ニューイングランド 多産
サミュエル・シュアール コミュニティ

1 はじめに

トリストラム・コフィン執事の貞節な妻
故ジュディス夫人の記念として
177 人にのぼる子どもと孫を見るまで生きる
1705 年 12 月 15 日 80 歳で死す⁽¹⁾

マサチューセッツ州ニューベリーに眠るトリストラム・コフィン (Tristram Coffin) の妻ジュディス・コフィン (Judith Coffin) は、上記の墓碑銘が示すように「177 人にのぼる子どもと孫」を見るまで長寿を全うした。ジュディスは最初の夫との間に 3 人の子どもを産み、次の夫であるトリストラムとの間に 10 人の子どもを産んだという。ジュディスはまさに「子宝」に恵まれた女性であった。

アメリカ植民地期のニューイングランドはジュディスのような「多産」(fertility) が特徴であったと考えられている。古くはトマス・ロバート・マルサスが『人口論』(1798 年) の中で、植民地期ニューイングランドの人口が急速に増加したと述べている。その一方でジョン・デモスは、通常、植民地時代の家族が拡大家族であったと考えているが、彼らの家族構造は主に親と子どもからなる核家族であったことがわかってきたと指摘している⁽²⁾。果たして、ジュディスのような多産は当時のニューイングランドにおいてどの程度一般的であったのだろうか。

本稿では、アメリカ植民地期ニューイングランドにおけるピューリタンたちの「多産」について考察する。彼らの多産とは実際にどのようなものであ

ったのか。また多産であるとしたらそれと相関関係にあった要因として何が考えられるのか。もちろん当時の植民地期ニューイングランドに住んでいたのはピューリタンだけではないし、多産はピューリタンに限られた特徴ではない。そのような多様性を認めつつ、ニューイングランドに住むピューリタン家族における結婚、出産、子ども、コミュニティ（共同体）がどのようなものであり、それが多産とどのような関係にあったのかを考察する。

そもそもピューリタンが大西洋を渡りニューイングランドに移住したのは、単に宗教上の理由のみでなく（そのことが重要であることは言うまでもないが）、「目に見える神の国、すなわち外見に表れた行為が神の掟に合致し、平穩で正直な市民生活が家庭、教会、国家に広がっている社会」⁽⁴⁾を建て上げるためであったとエドマンド・モーガンは指摘する。これは、ピューリタンが描いた理想の社会像は、家庭から教会、国家へと広がりをもつものであったことを物語っている。本稿では多産との関わりで、結婚観、人口、子ども観、子どもを取り巻く人々の絆という四つの側面に限定してピューリタン家族における「多産」という状況を論考する。これら四つの問題群を分析した上でケーススタディとして、商人であり裁判官をも務めたサミュエル・シューアル⁽⁵⁾（Samuel Sewall, 1652-1730）の家族生活をも考察対象とする。シューアルが残した日記は、家族史家がたびたび言及していることを考慮すると、植民地期ニューイングランドの社会生活を記録した貴重な資料として重要なものであると位置づけられる。

2 ピューリタンの「多産」とシューアルに関する先行研究

（1）ピューリタンの「多産」に関する先行研究

植民地期ニューイングランドのピューリタンに関する膨大な文献の中で、彼らの「多産」はどのように論じられてきたのであろうか。⁽⁶⁾前述のマルサスは、当時のニューイングランドにおいては、おそらく歴史に類例を見ない速さで人口が増加したと述べている。マルサスによると、1643年にニューイングランド4州に定住した人口は21,200人であったのに対して、1760年には500,000人とおよそ23倍に増大した。この爆発的な人口増加の理由をマルサスは入手可能な広大な土地と豊富な食料に帰している。⁽⁷⁾

次に、1980 年以降の研究の中でピューリタンの多産の問題がどのように論じられているかを、三つの著作を通して概観する。

まず、アメリカ家族の通史的研究を著したスティーヴン・ミンツとスーザン・ケログは、当時の女性が頻繁に出産を繰り返しており、多くの女性が少なくとも 6 人は子どもを産み、次の出産との間隔は 20 ヶ月から 30 ヶ月ほどであったと指摘している⁽⁸⁾。

また、メアリー・ノートンは 17 世紀半ばのニューイングランドとチェサピークの裁判記録に基づき、ジェンダーの観点から家族・共同体・政治における権力関係を分析した。出産に関してノートンは、それが成人女性の生活において中心に位置する経験であったと見なしている。当時、避妊の形跡は見られず、女性は結婚後 1 年以内に妊娠するのが一般的であった。その後 2、3 年おきに妊娠し、まさに妊娠、育児、離乳というサイクルの繰り返しの中で生活していたと指摘している⁽⁹⁾。

さらにローレル・ウルリッチは 1650 年～1750 年の北部ニューイングランドの女性の生活の研究の中で、ザッキウス・コリンズ、マシュー・パッテン、ジョゼフ・グリーンという 3 人の男性の日記証言を通して、彼らの妻の出産がどのようなものであったのかを報告している。コリンズ夫人とパッテン夫人はともに 11 人の子ども、グリーン夫人は 9 人の子どもを産んだ。それぞれの平均出産間隔は、22 ヶ月、23 ヶ月、25 ヶ月であった。これら三家族についてウルリッチは、単に多産であるのみでなく、「並外れて健康で、前近代的な出産のパターンを理想に近いかたちで表す代表例」であると見なしている⁽¹⁰⁾。

植民地期ニューイングランドのピューリタンにおける「多産」の問題を概観するとき、女性が結婚後 1 年ほどで第 1 子を出産し、その後 2、3 年の間隔で 40 代半ばまで子どもを産み続けるということが決して例外的ではなかった状況が浮かび上がってくる。本稿ではさらに多産の問題をピューリタンの結婚観、人口、子ども観、子どもを取り巻く人々の絆という四つの側面から論考する。

(2) サミュエル・シューアルに関する先行研究

シューアルの生涯については、大下が簡潔に要約している。シューアルは「イギリスに生まれたが、すでにマサチューセッツに移住していた父に伴わ

れて植民地に渡米、ハーヴァード大学を卒業した。植民地有数の富裕な商人の娘、ハンナ・ハル（Hannah Hull, 1657/8-1717）と結婚、教職者にならずに商業に従事、かたわら植民地政府の重要な公職を歴任、判事も勤めた。セイラムの魔女裁判の判事ともなったが、後日判決を誤りとして公に自己批判した⁽¹¹⁾」。

前述のようにシュールが残した日記は、当時の社会生活を知る上で貴重な資料として、家族史研究者がたびたび言及している。フィリップ・グレーヴンは植民地期アメリカにおける三つの異なる気質のパターンを「厳格派」気質、「中庸派」気質、「寛容派」気質と区分し分析しているが、彼はシュールの親子関係を「中庸派」に属するものとして位置づけている。また前述のミンツとケログは、シュールの日記が「17世紀の家族生活を取りわけ全般にわたって生き生きと描写している」もとであると位置づけ、植民地期ニューイングランドの家族生活を論考する上で、シュールの家族描写を基に当時の家族像を概観している。シュールの日記は当時の家族像を再構成する上で重要な情報を提供する一次資料であると考えられる。⁽¹²⁾

翻訳文献の中で最もまとまってシュールの親子関係を分析しているものにリンド・ポロクの研究がある。その中でポロクは20箇所以上にわたってシュールの親子関係に言及している。そのほとんどが、この時代の親子関係が子どもに対する無関心を示すものでなく、むしろ愛情の伴ったものであることを論証するための一次資料として、シュールの日記に言及したものである。⁽¹³⁾その意味では、ポロクの研究はシュールの家族関係について多くの貴重な言及を含んでいるが、彼女の分析枠組に沿った分析という感は免れない。

シュールの日記に関しては、大下尚一による抄訳がある。これは1677年1月13日から1727年12月22日までのものであるが、最初の抜粋である1677年1月13日の日記の次が1692年11月6日という15年もの隔たりがあり、断片的なものと言わざるを得ない。シュールの日記の決定版にはM. ハルシー・トマス編集の二巻本（1973）がある。本稿におけるシュールの日記への言及は、これに拠っている。現在入手可能なものとしては、メル・ヤザワの編集による抜粋がある⁽¹⁴⁾（1998）。

シュールの生涯については、1960年代にオラ・ウィンスロー（1964）とT. B. ストランドネス（1967）による伝記がそれぞれ出版されている。最近

では、シュール⁽¹⁵⁾の家族生活を再構成する研究がジュディス・グラハムによって出版された(2000)。本稿はグラハムの研究を「多産」という観点から補完することを目指している。

3 ピューリタンと結婚

ピューリタンにとって結婚とはどのようなものだったのだろうか。ピューリタンは結婚についてどのような考えをもち、どのように結婚に臨み、またどのような結婚生活を送っていたのだろうか。当節では、ピューリタンの結婚観、求婚、家父長制と妻の服従という三つの側面から考察する。

(1) 結婚観

そもそもピューリタンは結婚についてどのような考えをもっていたのだろうか。1500年～1800年のイギリス家族の歴史を書いたローレンス・ストーンは、イングランドにおいて、結婚する理由として伝統的に言われていた「姦淫の防止」と「嫡出子の出産」という二つに、夫婦愛という「精神的な親密さ」が第三番目の理由として公的に付け加えられたのは1549年のことであり、この追加は英国国教会の大司教トマス・克蘭マー(Thomas Cranmer, 1489-1556)によるものであったと指摘している。結婚の目的が夫婦愛と親密さをも含んでいるということは、ピューリタンの家政書著者であるウィリアム・パーキンス(William Perkins, 1558-1602)、ウィリアム・ガウジ(William Gouge, 1578-1653)らにも引き継がれているとストーンは指摘している。この点は、通常ピューリタンの思想と実践は異性関係における自然的あるいは官能的感情を完全に抑圧しようとするものであると理解されることが多いので、銘記する必要がある。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

それでは、ニューイングランドのピューリタンは、結婚についてどのような考えをもっていたのだろうか。モーガンは、ピューリタンにとって夫婦愛はすべての結婚した者に対して神が与えた義務であると述べている。夫と妻はこの世の何にも増して互いに愛し合わなければならない。そうしないならそれは互いに対する落ち度であるのみならず、神に対する不敬でもある。その一方で、ピューリタンにとって夫婦愛は節制の伴ったものでもあった。なぜなら、すべてのキリスト者は、自分の最高の愛を神に対してのみ向けるの

でなければならず、夫婦であったとしても被造物である相手を神の位置においてはならないのである。ピューリタンにとって愛とは、決してロマンティックな情熱ではなく、むしろ理性的なものであり、愛情は理性の指導のもとで意志によって命じられなければならないものであった。⁽¹⁸⁾したがって、まず理性が愛の対象を選び、その理性的な選択に従って愛情を働かせるものであると考えられていた。たとえばピューリタンの牧師であり詩人でもあるマイケル・ウィグルワース (Michael Wigglesworth, 1631-1705) は、敬虔なエヴリー婦人に求婚した際、彼女に対する激しい情熱に訴えるのではなく、なぜ彼女が彼と結婚すべきであるかについて十の理由を注意深く数え上げ、さらに彼女が挙げた二つの反論に答える手紙を書いたのであった。⁽¹⁹⁾

夫婦の性の営みについてはどうだろうか。ピューリタンは性的に結ばれない結婚が不完全であり不適格なものであると見なしたことをモーガンは指摘している。夫が性的不能であることがわかれば、妻は結婚関係を解消する自由があった。このことが成文化されたのはニュー・ヘイヴンにおいてだけであるが、マサチューセッツ植民地の記録は、夫の不能が理由で結婚が無効になったケースがいくつか見られる。このように性における結びつきは、結婚した夫婦にとってお互いに対する最初の義務であった。⁽²⁰⁾この点についてデモスは、夫の性的不能がなぜ離婚の理由になったのかは明らかではないが、その背後には、結婚は子どもの誕生を伴うことが必然的であると見なす感情があったのではないかと推測している。その根拠として、1686年に夫の性的不能に伴う離婚審理での証言を挙げている。その場で妻は夫について、「生殖の行為をいつも全うすることができない」と描写している。⁽²¹⁾さらにこの点について、ピューリタンの夫婦、特に妻にとって「子どもを産むこと」がどのような意味で重要であったのかは、エバの罪と呪いという旧約聖書の教えに対するピューリタンの理解との関連から、後節でさらに検討する。

以上のように、ピューリタンの夫婦にとっての基本的な義務とは、平穏な生活をとともにすること、性的な結びつきと貞操、そして夫が妻を経済的に援助することであった。⁽²²⁾たとえば、ピューリタンにとって夫婦がともに生活をし、愛し助け合うことが重要視されていたことを示すひとつの事例として、マサチューセッツ植民地の法律は、イングランドに自分の配偶者を残しているすべての結婚している者が、次の船が出るときに本国へ戻ることを義務づけ、実際に施行されていたことをモーガンは挙げている。⁽²³⁾

このように、ピューリタンにとって結婚とは、少なくとも理想としては、夫婦の信仰、愛、理性、性、生活、経済を含む全人格的な結びつきによる営みとして理解されていたと見ることができよう。

(2) 求 婚

それではこのような結婚観のもとで、求婚はどのように行われていたのだろうか。その特徴を三つの観点から分析する。

第一に、求婚に際して相手がどのような人物であるか、その社会的地位から性格に至るまで考慮された。モーガンは、結婚相手を選ぶ際の重要な要素としての、相手の社会的地位を挙げている。結婚生活における幸福のためには、互いの生まれ、教育、宗教、財産が釣り合っていなければならない。さらにウィルソンは、求婚に際して、17世紀から18世紀前半にかけては、男性は気立てがよく貞節で敬虔な女性を結婚相手に求めていたと述べている。ところが18世紀後半以降は、そうした徳以上に、美しさ、富、利発さを女性⁽²⁴⁾に求めるようになった。

第二に、男性は求婚に向けての明確な行動に出る前に、相手の親と自分の親とに相談し交際の許可を得なければならなかった。もし交際の許可が下りたとしても、当事者は親に事の状況を定期的に報告することが期待されていた⁽²⁵⁾。

第三に、女性に求婚する場合の多くは金銭上の取り決めが伴っていた。この点についてモーガンによると、再婚者同士の場合は当事者同士が直接金銭に関する交渉を行うが、多くの初婚の場合には、当事者が互いの愛情を育むのに専念する傍らで、その両親同士が金銭に関する一部始終を話し合って決着をつけたと指摘している⁽²⁶⁾。この金銭上の交渉が合意に至ると、法的な契約を結び、結婚が承諾される。子どもに対する親としての責任は通常ここまでで終わる。しかし、結婚後であっても、金銭的な合意が履行されなかった場合には、訴訟を起こして争うのは親たちであった⁽²⁷⁾。ここに結婚における親の責任と干渉という実態が如実に表れている。

このように、相手の社会的地位と性格を考慮し、親が全面的に介入して金銭上の取り決めをする求婚行為は、近代的な自由恋愛の対極にあるもののように見える。その一方で、ピューリタンによる求婚は、結婚が彼らにとって愛情以外の要素も重要な位置を占めていたことを示している。

(3) 家父長制と妻の服従

ニューイングランドの植民地期は一般に「家父長制」(patriarchy)の時代と言われている。この時期の父親は、「家父長的父性」や「厳格な家父長」などと形容されている⁽²⁸⁾。その内実はどうだったのだろうか。ここでは、夫婦関係における夫の権威と妻の服従について考察する。

まず、家父長制の時代と呼ばれる理由のひとつに、財産権に関する夫の優位が挙げられる。これはイギリスのコモンロー法系の伝統を引き継ぐものであることが指摘されている。たとえばウルリッチは、夫に対する妻の服従が単に宗教的な義務であるのみでなく、法的な要求であることに言及している。これはウィリアム・ブラックストンの『英法釈義』(1765)において、「結婚によって夫と妻は法的にひとつの人格となる」と説かれていること、すなわち妻の法的人格は夫のそれに吸収されるものという理解に基づくものである。その一方でウルリッチは、妻は通常夫の遺産の少なくとも三分の一を相続することが法的に認められていたことも併せて指摘している⁽²⁹⁾。同様の点についてモーガンは、17世紀ニューイングランドのマサチューセッツにおいて、結婚後妻は財産権を夫に引き渡していたことを指摘している⁽³⁰⁾。

次に、夫に対する妻の服従は「自発的」(voluntary)なものであると位置づけられていた。モーガンによると、この自発的な服従という考えは、社会秩序を神の創造の秩序に基づいて理解するピューリタンの世界観と社会観を反映している。すなわち、神の創造の秩序の中には、あるもの(存在)が他のものに従属するという秩序があるがゆえに、人間社会も当然そのような秩序の原理に従って構成されていると彼らは考える。具体的に見ると、社会の秩序の本質は、家庭においては妻に対する夫、子どもに対する両親、使用人に対する主人の優位、ならびに教会においては会衆に対する牧師と長老の優位、そして国家においては民衆に対する支配者の優位である。しかもこのような秩序の中での従属関係は、強制的なものではなく「自発的」なものであると考えられていた。現代人の目から見れば強い自発性の感を免れない妻の服従も、ピューリタンにとっては「自由な同意」(free consent)によるものであると見なされていた。さらにウルリッチによると、妻が夫に従うことは神が定めた秩序であるが、妻が夫に従うことと、子どもが親、使用人が主人に従うこととを同一視してはならないとピューリタンは考えていた。

すなわち、お互いに対する夫婦の愛情が服従することを手助けすることに変えるのである。⁽³¹⁾

その一方で、ピューリタンにおける家父長制と妻の服従の問題に関して、新しい解釈を与えようとする研究もなされている。ウィルソンは、植民地期ニューイングランドにおける家父長制は、単なる権威主義的な父ということ以上にもっとニュアンスに富んだものであると指摘している。たとえば、当時、結婚において夫婦の協力関係は理想でありまた現実でもあった。しかしそれは、男女が平等であったということではない。男性も女性も家庭全体と子どもとの関係においてはそれぞれの関わり方をもっていた。夫と妻の日常の役目は異なるとしても、両者とも共通の目的に向かって働いていた。幸福な結婚生活においては、互いに助け合うことと家族の幸福を目指すことが中心を占めていた。⁽³²⁾ また藤本は、アメリカ植民地時代の家庭において、妻である女性が必ずしも服従を強いられるばかりの存在ではなかった点を指摘している。その例として、1650年に配偶者を殴打することを禁ずる法律を制定したマサチューセッツ湾植民地で、虐待を理由に夫を訴えた妻がいたことを挙げている。これは妻が家庭外で頼るすべをもっていたことを示していると藤田は位置づけている。⁽³³⁾

(4) シューアルから見たピューリタンの結婚

植民地期ニューイングランドのピューリタン家族における結婚観と結婚生活を考察した上で、ケーススタディとして前述のサミュエル・シューアルの家族生活を取り上げる。ここでは、シューアルの日記を研究したグラハムの見解を中心に、シューアルに見るピューリタンの結婚観を考察する。

まず、シューアルとハンナとの結婚は互いに幸せと利益をもたらした。ハンナの持参金はシューアルが若くして経済的・職業的・社会的成功を得ることを可能にした。それに加えて、二人の結婚は愛情の伴った結婚であった。ハンナに対するシューアルの愛情についてグラハムは、シューアルがイギリスに旅行した1688年11月27日の日記で、出航5日目に彼がハンナの手作りの肉詰めパイを食べながら彼女を思って胸が張り裂けるばかりだった思いを記していることを挙げている。⁽³⁴⁾ このように、シューアルとハンナの結婚が愛情によって結ばれているとともに金銭的な側面も重要な役割を果たしていることは、前述のピューリタンの結婚観と一致している。

また、ハンナは結婚生活において出産、育児、さらには自分自身の病氣のために非常に多くの時間を家で過ごしていたということは否定できないとグラハムは述べている。これはシュールが仕事や公務の中で育児をすべてハンナに任せて子どもに無関心であったということではない。さらにシュールは時々ハンナと二人で旅行もしていた⁽³⁵⁾。

さらに、シュールはハンナの優れた判断力を高く評価しており、重要な事柄を彼女の判断のもとに委ねていたこともグラハムは指摘している。たとえば 1704 年 1 月 24 日に、シュールはある借金を返済し自分の小遣い分を差し引いた後、持ち金の残りをすべて妻に渡した。シュールはハンナに関して「彼女は私よりもずっとやり繰りする能力がある」と日記に記している⁽³⁶⁾。

加えて、シュールとハンナの間には 6 人の成人した子どもがいたが、彼らが婚約以前の交際に入ったとき、両親は彼らの行動を注意深く監督していた。この点についてグラハムは「両親は交際中の二人にある程度の自由を与えたが、二人の行動を注意深く監督していた。そして若者の判断や事の成り行きが矯正を必要とするように見えたら、躊躇なく干渉した」と見なしている⁽³⁷⁾。これも婚約前の交際に対するピューリタンの親の典型的な態度であると理解することができる。

4 ピューリタンと歴史人口学

次に、歴史人口学の研究を参考に、ピューリタンの結婚年齢、出生率、乳幼児死亡率について考察する。

(1) 結婚年齢

ストーンは、北西ヨーロッパの至る所において、中産階級と下層階級の男女が晩婚傾向にあったことを指摘している。17、18 世紀をピークに、男子が 27～28 歳、女子が 25～27 歳が初婚年齢の中央値であるとしている。ストーンによると、「女性たちが 25 年間の受胎期のうちの 10 年に及ぶ生殖周期から撤退することは、人口成長を減速させる上で決定的に重要な要因であった」。つまり晩婚化が人口減少と関連しているという見解である⁽³⁸⁾。

それではニューイングランドではどうだったのだろうか。デモスは、プリマス植民地における平均結婚年齢は、男性で 1600 年以前に生まれた者では

27.0 歳で、以後徐々に下がり、1675～1700 年の間に生まれた者では 24.6 歳であると指摘している。一方女性は、1600～1625 年の間に生まれた者で 20.6 歳、以後徐々に上昇し、1675～1700 年の間に生まれた者で 22.3 歳⁽³⁹⁾になっている。

ウィルソンは、ニューイングランドにおいて、男性の初婚は通常 20 歳代の後半で行われていたが、18 世紀が進むにつれて、より若い年齢で結婚するようになった。それに対して、17 世紀から 18 世紀初頭にかけて女性は 20 歳代の前半で結婚していたが、18 世紀後半には晩婚化が見られると指摘している。その理由としてウィルソンは、人口に占める男女比が均等化ししかも地域によっては女性の人口のほうが多くなったとき、女性の結婚年齢は上がると考える。そのような状況で男性の結婚年齢が下がるのは、男女比から見て彼らの選択の幅が広がったことと、親の影響力が低下したことを挙げ⁽⁴⁰⁾ている。

さらにウルリッチは、未婚女性の妊娠が 18 世紀において徐々に増加し、独立革命前にはピークに達したことを指摘している。その理由としてウルリッチは、教会、裁判所、親たちが押しつけていた性行動に関する外的支配が衰退し、19 世紀の内面化された新しいヴィクトリア朝的道德観がまだ現⁽⁴¹⁾れていなかったことを挙げている。

(2) 出生率

まずイギリスの事例から考察する。ストーンは、一般に近代以前の家庭には大勢の子どもがいたと信じられているが、これは人目につく例外的な事例から導き出された幻想であると指摘している。その上で、イギリスの上流階級の妻一人当たりの平均的な子どもの数は 4 人以下であり、非常に健康的な条件に恵まれたニューイングランドのヨーマンとフリーホルダーのあいだ⁽⁴²⁾では 6 人ないし 8 人であったと述べている。

ラスレットも、工業化前のイギリスおよびフランスについて既婚女性がその成熟期に夫婦がそろっているあいだ毎年子どもを産み続けたと考えるのは正しくないと述べている。ひとりの女性が産んだ子どもの数は、多くても 7 人強、実際には 4 人程度であったと指摘し、ストーンとほぼ同じ人数を挙げている。そう考える三つの理由をラスレットは提示している。第一に、子どもを産めない女性がいたことに加え、子どもをたくさん産む女性だけが結婚

するわけでもなかったこと、第二に、子どもを産む能力は年齢とともに低下し、当時の女性は現在よりも早く出産ができなくなっていたこと、第三に、子どもを授乳させる期間が今より長かったのでかなりの程度妊娠が抑制されていたことを挙げている。⁽⁴³⁾

その一方でラスレットは、ルイ・アンリによる 17 世紀後半のジュネーヴに関する歴史人口学的研究、および E. A. リグリーによる 17 世紀中葉以降のイギリスの農村コリトンに関する家族復元法に基づく研究によって、当時この地域で意識的な産児制限が行われていたと考えている。しかし、このことは他の地域でもっと広範に証明されない限りはコリトンに限定されるものであって、避妊が当時イギリス全体の人口に影響を及ぼしていたとは断言できない。むしろラスレットは、イギリスにおいては母親が子どもを自分の母乳で育てた習慣こそ、イギリスにおいて出生数が比較的少なかった原因であると考えている。⁽⁴⁴⁾

それでは、ニューイングランドにおけるピューリタンたちの出生率はどれくらいだったのだろうか。たとえば山本は、1640 年代までにピューリタンとして一般に仕分けられるイギリス人のアメリカ大陸への組織的移住は完成し、その後はマルサスが『人口論』で言うように、アメリカの人口が爆発的に増加したと考えている。夫婦が 6 人、8 人と子どもを生むのは普通で、中には 10 人、12 人の子どもを抱えた大家族も少なくなかったと主張している。⁽⁴⁵⁾ これは先に見たストーンやラスレットによる同時代のイギリスにおける出生率よりも多い数字である。

デモスの研究によると、プリマス植民地の三世代にわたる合計 96 家族のデータに基づいて算出したとき、第一世代の家族における平均出生率は 7.8 人、第二世代は 8.6 人、第三世代は 9.6 人であった。⁽⁴⁶⁾

また藤本は、ニューイングランドにおいて一家族の子どもの数は平均 7～9 人であったと述べている。「ニューイングランドへの移住者の第一世代において、女性の平均結婚年齢は 10 代末～20 代初めが一般的であった。女性のこの早婚の理由については、男女比がしばしば問題にされるが、荒野に植民地を建設するには、その成功が、子どもを多く産み育てることにかかわっていたことは想像にかたくない。その結果、女性の出産回数は増え、結婚一年以内に妊娠し平均して二年ごとに、30 代末～40 代初めまで産み続け、⁽⁴⁷⁾ アンドヴァーを例にとると、子どもの数は一家族平均 7～9 人であった」。

さらに出生率の問題は、出産に関してニューイングランドの人々がどのような考え方をもっていたかということとも密接に関連している。この点についてウルリッチは、ピューリタンの特に母性像と、19世紀のヴィクトリア時代の母性像は異なっていたと述べている。初期のニューイングランドにおける母親の役割の特徴としては、愛情、信仰、慈善とともに「多産」を挙げている。幼児死亡率が高かった当時において、子どもを産み、またその子どもが子どもを産むことを見ることは、この地上における大きな祝福であり栄誉なことであった。したがって、前述のジュディス・コフィンのように177人の子どもと孫に恵まれるということは、文字通り神の祝福以外の何物でもないと考えられていたのである。⁽⁴⁸⁾

子宝に恵まれることが神の祝福であるというピューリタンの考えに関して、佐藤はその背後にある宗教的昇華とも言うべき心理を分析している。佐藤によると、実はピューリタンの「子どもを産むこと」についての考え方にはパラドキシカルな側面がある。すなわち、伝統的なキリスト教の考え方によれば、出産の苦しみは、エデンの園において禁じられていた木の実を食べたエバの罪のゆえに、すべての女性に神から与えられた「呪い」に他ならなかった。ところが、出産の苦しみが女性に対する神の呪いであるという教え、そして出産に伴う死の可能性を前にして、女性たちは自らの「魂の救い」を求めざるを得なかった。佐藤は、出産というエバの呪いと死の恐怖を通して救いへの希望を先鋭化させる過程で、「呪いは、逆説的に神の祝福へと転化されていった」と指摘している。すなわち「出産の無事は神の祝福の証であると解された」のであった。前述のように、当時夫の性的不能が離婚の理由と認められた背後には、ひとつに、このような出産による呪いから祝福への転化という女性の求めがあったと見ることができるのではないだろうか。⁽⁴⁹⁾

要約すると、ニューイングランドのピューリタンにおいては、地域差・世代差はあるものの、大家族平均7～9人の子どもを生んでいたと考えられる。さらに、多産が母親のひとつの理想像と見なされていたことも見逃せない要素である。女性にとって「子どもを産むこと」は、エバの呪いと死の恐怖ではなく、神の祝福のうちにあることを確信させるものとして理解されていた。

(3) 乳幼児死亡率

ストーンは17世紀前後のイギリスにおける子どもの死亡率の高さとそれ

をめぐる親の態度について分析している。ストーンによると、イギリスの貴族と農民の子ども全体のうち、四分の一ないし三分の一は15歳までに死んでいた（15歳までに約25～33%の死亡率）。特に貧民の幼児死亡率が全体に占める割合が高いのは、「両親の無責任な怠慢」のせいであるとストーンは考えている。さらに、親たちは、高い幼児死亡率を前にして自分自身の精神的な安定性を守るために、「幼児期にある自分の子どもたちに対して心理的にかかわる程度を差し控えざるを得なかったという事実は動かせないだろう」とストーンは分析している。換言すると、子どもに対する「両親の無責任な怠慢」は、子どもの高い死亡率の原因であり結果でもあるという悪循環をストーンは指摘している⁽⁵⁰⁾のである。

それに対してポロクは、幼児の死亡率が高いために親は子どもに無関心であったという見解に反論している。16～17世紀に出版された育児書は、「両親の無責任な怠慢」という説を支持しなかったとポロクは主張する。これらの出版物では、ほとんどの親が子どもの病気に直面すると心配し狼狽している様子が顕著である。実際、幼児の死亡率の高いことはむしろ親に一層心配をかける原因となっていたと考えられる。「親は子どもがよく死亡する事実を十分認識したからこそ、子どものちょっとした風邪や咳にも恐怖の発作に襲われることが多かった」とポロクは結論づける⁽⁵¹⁾。

さらにラスレットは、直接ストーンの名前には触れないものの、従来の子どもの死亡率の数値は高すぎると反論している。ラスレットは16世紀以降のイギリスでは10歳以下の子どもの死亡率が四分の一を大きく上まわることは決してなかったと述べている（10歳までに25%以下の死亡率）。0歳児の死亡についても、生まれた赤ん坊全体の三分の一ほどが死んだのだと考えられることがあるが、その割合は五分の一つまり1000人につき200人にも達することはなかった。集落のタイプによって差があり、農村部よりも都市部で条件が悪かったことは確かであるが、1000人につき150人くらいがふつうの数値であった。19世紀になって全国的なデータ（公式統計）が入手できるようになった時点でも、この傾向を確認できると述べている⁽⁵²⁾（0歳児は15～20%の死亡率）。

それでは、ニューイングランドのピューリタンたちはどうだったのだろうか。この点についてデモスは、ニューイングランドのプリマス植民地において、0歳～21歳までの死亡率は最大で25%くらいであり、実際の数字はもっと

低かったと指摘している（21歳までに25%以下の死亡率⁽⁵³⁾）。さらにデモスは、新生児の死亡率を決定することは非常に難しいことであると認めつつ、当時は10人に1人の新生児が死亡していたと考えるのが最も妥当であろうと推測し（0歳児は10%以下の死亡率⁽⁵⁴⁾）、この数字は17世紀という時代においては「驚くほど低い」数値だとしている。

その一方でスタナードは、子どもの死は多くの場合記録に残されないので、子どもの死亡率が低めに見積もられることは不可避であると指摘している。その上で、グリーヴンの研究に基づいて、植民地期ニューイングランドにおいては、一家族の出生数が平均8.8人という社会で、4人のうち1人の子どもが10歳未満で死亡⁽⁵⁵⁾していたと考えるのが妥当であろうとしている（10歳未満で25%の死亡率⁽⁵⁵⁾）。

子どもの死亡率を低く見積もるデモスと高く見積もるスタナード。いずれにしてもニューイングランドにおいては、同時代のイギリスよりも子どもの死亡率は低かったと見るのが妥当であろう。

（４） シューアルから見たピューリタンの人口学

まず結婚年齢について考えてみると、1676年の結婚当時シューアルの年齢は24歳、ハンナは18歳であった。これは当時の平均結婚年齢を考慮すると若い年齢での結婚である。彼らの子どもたちも比較的結婚年齢が低かった。3人の娘エリザベス、メアリー、ジュディスは、ともに18歳で結婚している。成人した2人の息子サムとジョゼフはそれぞれ24歳と25歳で結婚した⁽⁵⁶⁾。病弱な長女ハンナは生涯独身であった。

次に出生数はどうであったか。シューアルとハンナの間には14人の子どもが誕生し（1人は死産）、そのうちの6人が成人した。ハンナは結婚した翌年に長男ジョンを出産した後、25年間の間に息子7人と娘7人を産出した。出産間隔の平均は19ヶ月である。グラハムは14人を産出するということは当時としては異例ではなく、またピューリタン社会ではいかなる避妊も自然に反するものとして非難されていたと指摘している⁽⁵⁷⁾。

さらに子どもの死亡率についてはどうであろうか。シューアルとハンナは14人の子どものうち1人を死産、7人を幼児期に亡くしている（57%の死亡率）。これはデモスやスタナードの見積もりよりも2倍以上高い数値である。けいれん発作をはじめとする病気がシューアル家の子どもの死因であったが、

当時のニューイングランドでは病気以外の子どもの死因として水泳やスケート中の事故や遊んでいる最中の転落等の事故死が多かったことをグラハムは指摘している。⁽⁵⁸⁾ 度重なる子どもの死を前にして、シューアルは自分の罪のせいで子どもが死んでしまったと思い、親としての資格がないとの思いを強くもっていたとグラハムは分析している。その点で、シューアルもハンナも自分の子どもたちの死を心から悲しみ、決して無関心な態度は取っていないと見なすことができよう。⁽⁵⁹⁾

5 ピューリタンにおける「子ども」

植民地期ニューイングランドのピューリタン家族が多産であったことを見るとき、彼らがそもそも「子ども」という存在をどのように理解していたのかという子ども観の問題を考察する必要がある。ここでは、原罪観に基づく子ども理解と子どもの接し方という二つの点から論考する。

(1) 原罪のゆえに墮落した子ども

ピューリタンの子ども観にとって根底にある認識は、「原罪のゆえに墮落した子ども」という理解であった。ピューリタンにとって、人間は大人も子どもも区別なく皆が罪ある者であった。この点についてポロクは、「原罪は彼らの教義の不可欠な部分であったから、子どもにそれを認識させることは当然親の役目であると信じていた」と語っている。⁽⁶⁰⁾ また藤本は、「植民地時代の人々の、子どもの誕生、病気、死に対する反応の中には、原罪観に基づき、子どもの運命を決めることにおける神の摂理の不可避的な力をみることができると指摘している。⁽⁶¹⁾ さらにスタナードはピューリタンの子ども観について、「ピューリタンの子どもは罪と墮落で蝕まれている。アダムの罪の残骸によって腐敗した存在である」と述べている。⁽⁶²⁾ このように、原罪によって墮落した存在という子ども理解は、ピューリタンの子ども観の中心にある認識であったと見ることができる。

(2) 子どもの接し方

原罪観という共通項をもちつつも、原罪を背負った子どもにどのように接するかという点で、ピューリタンのとった態度と行動は決して一元的なもの

ではなかった。まずは、ストーンが言うように、子どもは原罪のゆえに墮落した存在であるがために、「抑圧的」に扱うという態度である。墮落し未熟な子どもたちは、「理性的な判断を下す能力を欠いた単なる動物」とみなされており、動物とまったく同じようにしつけられるべき存在であったストーン⁽⁶³⁾は考えている。

それに対して、原罪に基づく子ども観は、必ずしも子どもに対して抑圧的になり、彼らの意志を挫折させる者ばかりではなかったとの反論が多く出されている。ポロクは、ピューリタンを含むこの時代の親が子どもに対して抑圧的であったという主張に反論している。たとえばピューリタンの指導者であるボストンのコトン・マザー (Cotton Mather, 1663-1728) は、子どもは原罪に満ちた存在と考えていたにもかかわらず、子どもに体罰を加えておらず、むしろ堂々と体罰に反対していたことを指摘している。さらにスタナードは、ピューリタンが子どもたちを墮落しているが愛すべき存在であると見なしていたことを挙げている。⁽⁶⁴⁾

もちろん、この時代においても、グレーヴンが「寛容派」(genteel) 気質と呼ぶような、原罪説に基づかない楽観的な子ども観をもつ人々がいたことも確かである。そうであるとしても、ピューリタンは原罪のゆえに墮落した子どもという理解をもちつつも、愛すべき存在として子どもを見ていたことも事実である。このような二重の子ども理解は、ピューリタンの子どもに関する言説に特徴的に見られる「怒りの子たち」と「契約(恵み)の子たち」⁽⁶⁵⁾という二重の言い回しにも典型的に表れている。

(3) シューアルに見るピューリタンの子ども観

シューアルの家族は前述のグレーヴンの区分によると「中庸派」(moderate)の家族に区分される。中庸派は、「厳格派」(evangelical)とは異なり、原罪のゆえに自己否定の必要性を認めつつも、自己を完全に無にしなければならぬとは考えない。子どもの扱いは、その「意志を砕く」ことは認めず、かえて「意志を曲げる」ことで導こうとする。したがってグラハムは、子どもに対するシューアルの態度は、無関心なものでも抑圧的なものでもなく、暖かさと思いやりと愛に満ちたものであると評価している。たとえば、ポロクとグラハムはともに、シューアルの日記において彼が子どもに体罰を与えた記述は一箇所だけであることを指摘し、シューアルにとって体罰は例

外中の例外であったと見なしている。1692年11月6日付の日記に記されたこの体罰の出来事は、4才のジョゼフが妹ベティに真鍮の飾り物を投げておでこにけがをさせたり、祈りの時間に遊んでいたり、食前の感謝の祈りの最中に食べ始めた等の報告を受けて起こったものであった。シューアルはこのとき、まずジョゼフが揺りかごの裏に隠れようとするのを見て、エデンの園で罪を犯した後に神から隠れた「アダムが取った態度を悲しみとともに思い出した」と語っている。このように、シューアルは原罪⁽⁶⁶⁾ということばは使わないながらも、ジョゼフが取った態度に原罪の影を見ている。

その一方でシューアルは、1690年1月10日に、8歳になるエリザベスが地獄を恐れて泣き出したとき、シューアルも娘に同情して涙を流したことをグラハムは指摘している。この事例は、シューアルが信仰に関する事柄においても、厳格さばかりを子どもに求めるのではなく、子どもの年齢に応じた感受性⁽⁶⁷⁾に共感する態度をもっていたことを表している。

6 子どもを取り巻く人々の絆——親、世帯、親戚、そしてコミュニティ

ピューリタンたちにとって、子どもの誕生と成長を取り巻くのはどのような人々だったのだろうか。ピューリタンの時代は、ストーン⁽⁶⁸⁾の区分によると、「開放的血統家族の時代」から「限定的家父長制核家族の時代」へと家族構造が移行した時期である。ストーンの見解によると、この時期のイギリスの中流と上流の家族では、親族と隣人集団からなる拡散家族の情愛のネットワークが弱まり、夫・父の権威が教会と国家により理論的に強化された。このような状況はニューイングランドにも当てはまるのだろうか。むしろニューイングランドでは、核家族でありつつも、人々のさまざまなネットワークの中で子どもが生きていたのではないか。当節ではそれを親、世帯、親戚、そしてコミュニティ（共同体）という四つの観点から考察する。

(1) 親

まず、子どもにとってもっとも身近な存在である親との関わりはどうだったのだろうか。誕生とともに、子どもは授乳されなければならない。ここで誰が授乳するのかという問題が起こる。つまり母が母乳をやるのか、それとも乳母に預けるのかということである。ストーンによると、18世紀の半ば

を過ぎても、イギリスの富裕階級においては母親の多くに乳母を使う慣習があったと指摘する一方で、17世紀前半にはパーキンスやガウジといった影響力のあるピューリタンの作家たちは、母親が自分の母乳で子どもを育てることを強調していた。⁽⁶⁹⁾ポロクもこれらの作家たちが、「母親の乳が子どもにとって最高である、女性の乳房は授乳のために授けられている、下層階級の乳母による授乳で乳児は望ましくない性質を吸収する」と教えていると指摘している。⁽⁷⁰⁾

ニューイングランドではどうだろうか。ウルリッチは、北部ニューイングランドのすべての社会階層において母乳育児が標準的であったと述べている。しかしポロクは、ピューリタンの中にもこうした教えを実行に移していない者もあったことを指摘している。たとえば、コトン・マザーは敬虔なピューリタンであったが、どの子どもにも乳母をつけていたという。また、シュアルのように、新生児のからだに初乳はよくないという迷信のために、出産後の五日間は母親が自分の母乳を与えずに乳母をつけていた、と考えられる例もある。乳母による授乳の習慣は、過去数世紀の社会の幼児無視を主張する者の証拠事例として必ず使われてきたが、「乳母の元に送られた乳児は親に無視されたわけではなく頻繁に親の訪問を受けており、病気の時などはなおさらそうであった」とポロクは述べている。授乳以外にも、親たちは乳幼児期にわたって子どもの離乳、乳歯の発生、泣き声、歩行、言語、睡眠、予防接種等発達の諸問題に大きな関心に向けていたとポロクは主張している。⁽⁷¹⁾

ピューリタンはなぜ母乳育を重視したのだろうか。この点について佐藤は、いくつかの理由の中で、母乳育による「子どもの性格形成」と「母子間のコミュニケーション」の問題に着目している。ピューリタンは母乳を通して母親の性格や人格が伝達されると理解し、授乳という行為による人格的感化力にも注意が向けられていたと佐藤は指摘する。また、授乳に伴う母子間のコミュニケーションは宗教教育を含む育児行為の第一歩として見なされていた。⁽⁷²⁾

さらにピューリタンの親は、子どもたちの体だけでなく、魂の健康と成長にも責任を負っていた。ウィルソンによると、特に宗教教育は主に父親の役割とされていた。また、1642年のマサチューセッツの法律では、一家の主人は子どもと徒弟に対して英語の読みを教えなければならず、怠った者には20シリングの罰金を科していた。さらにすべての主人は、子どもと徒弟たちに対して少なくとも週に一度教理問答を使って信仰の基礎を教えなければ

ならなかった。ピューリタンの親にとって、教育の究極的な目的は、子ども⁽⁷³⁾の魂の救いであった。

総じて植民地期ニューイングランドの父親は「ピューリタンの家父長」というイメージをもたれているが、彼らは単に抑圧的な権威主義者であったのではないとウィルソンは指摘している。現代人の目には厳し過ぎるように見えたとしても、愛情深い父親であったのは、彼らの「感情のかたち」が異なっているのではなく、感情を「表現するかたち」が18世紀後半以降の父親たちと異なっているからだと解釈する。この時代の父親は、厳しさと愛情の両方のバランスを保ちながら子どもに相対していた。18世紀後半のロマン主義的な「表現するかたち」を身につけた父親とは「異なる声」で、植民地⁽⁷⁴⁾期の父親は、父親としての責任を果たすことを通して愛情を表現していた。

(2) 世 帯

近代以前の人間集団を表すことばとして、「家族」(family)とともに「世帯」(household)が用いられることがある。世帯の構成員は夫婦、子ども、徒弟であった。もちろん、徒弟をもたない世帯も多かった。ラスレットは、1619年にロンドンのパン屋たちが市当局にパン価格の値上げを申請した時に報告した世帯構成は、「パン屋の当主とその妻、賃金で雇われた渡り職人4人、徒弟が2人、女中が2人と親方自身の子供3~4人」の合計13~14人くらいであったと指摘している。世帯の中で若者や女性や徒弟は服従すべき存在であったが、それにもかかわらず、世帯内の人間と人間の関係はすべて情愛で結ばれたものとみなされるのがふつうだった。⁽⁷⁵⁾

それでは、ニューイングランドにおける世帯はどのような構成であったか。デモスは、1689年2月に行われたプリマス植民地ブリストルの人口調査に基づいて、世帯の構成について論じている。そこには人口421人、世帯数70が数えられている。人口の大部分を占めるのは子どもであり、町の総人口の54%にのぼっていた。一家族あたりの子どもの人数は3人強であるが、子ども数が1人~5人の家族はほぼ同じ数である。最も子ども数の多いのは10人(一家族のみ)であった。⁽⁷⁶⁾

ウルリッチは、北部ニューイングランドにおいて、徒弟に出るのは少年の方が少女よりも四倍多かったと指摘している。このことは少女が自分の家に留まるかあるいは徒弟ほど改まったものではないかたちで町の主婦の下で働

いたことを示している。17世紀の北部ニューイングランドでは、契約を結んで働く徒弟や奴隷がいたが、家庭を手伝いに来ている者のほとんどは近所の人か近所の娘たちであった。⁽⁷⁷⁾

ここでモーガンは、ほんの14歳になるかならないかの子どもを徒弟に出す習慣についてひとつの疑問を投げかけている。このことは、家族関係を重要視していたピューリタンの価値観を考慮に入れると、なおさら不可解なことに見えるとモーガンは考える。中世から続く徒弟制度をピューリタンも継承している理由の説明としてモーガンは、ピューリタンの親たちが子どもとの関係で自分たちのことを信頼していなかったからであり、子どもを愛し過ぎることによって甘やかしてしまうことを恐れたためだと分析している。デモスも徒弟に出す習慣の理由の説明の中で、モーガンによる説明が、それを証明する確たる証拠はないとしても、最も妥当な説明であると見なしている。⁽⁷⁸⁾ この説明の妥当性については、シュアルの事例の中で再考する。

それでは、世帯にはどのような機能があったのか。デモスは、プリマス植民地において家庭が果たした諸機能について、生産と交換、教育、職業訓練、宗教、矯正、福祉を挙げている。さらにウィルソンは、植民地期ニューイングランドの家庭生活の特徴として、男も女も一日のうちほとんどの時間を同じ空間でともに働きともに生活していたことを挙げている。家族メンバーは相互依存の関係にあった。家族の一人一人は、それぞれの性別、年齢、能力に応じて家族全体の幸せに貢献し、役割を分担していた。このようなシステムの中では、個人の自律性よりもお互いに対する義務と責任の方が優先されていた。それゆえ、男性の場合、家庭という場を通して家族と地域社会に貢献することで、自分の価値を証明していた。このように「役に立つこと」(serviceableness, usefulness)を通して、男性は一人前の大人の男性としての地位を我が物としていた。⁽⁷⁹⁾

(3) 親類関係

先に見たように、プリマス植民地の世帯は基本的に核家族であった一方で、それぞれの家族が他のすべての人々、特に親戚と何の関係ももたずに生活していたと考えるべきではないと、デモスは指摘している。実際に、親や子ども、兄弟やいとこたちが近所に住んでいることはよくあった。さらに子どもが見習いに出る場合にも、子どもから見た叔父叔母や祖父母のもとに行く場

合もよくあった。⁽⁸⁰⁾さらに離乳時期の過ごし方についてウルリッチは、北部ニューイングランドの母親たちの間に、離乳のときに子どもを家において実家にひとりで里帰りする慣行があったことを挙げている。この慣行をウルリッチは、離乳期にあった母と子がより快適にそのときを迎え、かつ父親が積極的に育児に関心をもち関わる経験であったと理解している。⁽⁸¹⁾

(4) コミュニティ

前述のようにストーンは、中世末期と16世紀の家族が、血統とコミュニティ（共同体）の両方から援助と統制を受け取っており、家庭内のプライバシーという感覚はまったくなかったと考えた。しかし16世紀末と17世紀初めには、親族と隣人集団からなるネットワークが弱まり、家族の核心部分が社会から隔離し始めた⁽⁸²⁾と見なしている。

ストーンのこの分析は、植民地期ニューイングランドにも当てはまるのだろうか。いやむしろ、これまでの論考が示唆するように、共同体の中でのネットワークは、多様なかたちで家族を取り巻いていたと考えるのが妥当であろう。ニューイングランドにおける家族と共同体との関係の主な特徴として、以下の二点を挙げることができる。

第一に、共同体は家族の構成員がそれぞれの義務を果たしているかを監視する機能をもっていた。デモスは、親に対する反抗は、共同体・地域社会の価値観に対する反抗であると見なされたと分析している。また、家庭がその機能を十分に果たさなかったときには、共同体・地域社会がそこに介入したとも述べている。またウィルソンは、妻が夫の家父長としての権威に反抗することは、彼の評判を落とす最悪の出来事であったと指摘している。家族のいざこざが公になることは、男性にとっては地域社会の中で大きな恥をかくことであった。さらに妻が不貞を働くことも地域社会において男性の名誉を傷つけることであった。さらにウィルソンは、家族を経済的に支えることは男性の大きな責任だと見なされていた。これは法律の定めることであった。男性が家庭において経済的な責任を果たしているかどうかは、地域社会の監視の目にさらされていた。経済的な責任を果たさない男性は社会からのあざけりを受けた。このように、共同体は家族の構成員がそれぞれの義務を十分に果たしているかを監視する役割を担っていたのである。⁽⁸³⁾

第二に、共同体は家族を援助するネットワークとしての積極的な機能をも

果たしていた。ウルリッチやウィルソンが指摘するところによると、植民地期の北部ニューイングランドにおいて、女性は地域社会の人々のネットワークの中で生活していた。このことを典型的に表しているもののひとつに出産の現場があった。出産は女性を中心にした営みであった。出産に臨む女性は、女性の親戚、友人、産婆に付き添われていた。夫は心配しながら別室で待たなければならなかった。出産後、出産に立ち合った女性たちはみな、出産したばかりの女性とともに祝いの食事をするようになっていた。このように出産とは、個人的な出来事ではなく共同体の出来事であったのである。⁽⁸⁴⁾

(5) シューアルに見る子どもを取り巻く人々の絆

まず、子どもに対する親としてのシューアルの関わり方である。ここで注目には値するのは、シューアルが子どもに対する責任は子どもが結婚することで果たされ完了するとは考えていなかったことである。むしろシューアルは、成人し結婚した子どもたちや孫たちの生活にも深く関わった。その一方で、結婚した娘エリザベスと夫グローヴ・ファーストは時としてシューアルの助力と訪問を婉曲に断ることもあった。そういうこともあったが、シューアルは生涯にわたって子どもたちに対して親としての責任と関わりをもち続けた。たとえば、息子サミュエルとその妻レベッカが不和のゆえに別居したときも、和解に向けてさまざまな援助と介入を行った。⁽⁸⁵⁾

また、世帯に関しては、見習いのための送り出しと受け入れが特記に値する。グラハムの指摘によると、シューアルがサミュエルを見習いに出し、ジョゼフを進学させ、また娘たちを家事と社会経験のために親族や家族ぐるみの友人たちのもとに数週間から一年ほど送り出した一方で、身内や身内外の子どもたちを彼の家に迎え入れている。その上でグラハムは、従来指摘されてきたピューリタンの親たちが子どもを見習いに出す理由を検討した後に、シューアルの子どもは、様々な実用的な理由と目的、すなわち教育、職業訓練、社会化、健康上の理由等のために送り出されているのであって、何かの原則や習俗、宗教上の教えやイデオロギーによって送り出されたのではないと結論づけている。⁽⁸⁶⁾

さらに、親戚関係はどうであろうか。グラハムはマサチューセッツのピューリタン社会において、親たちは共通の価値観をもち社会的にも宗教的にも利害のある親族たちが最も信頼に足る親代わりになると見ていたと指摘して

いる。その一方で、シューアルの親族関係を見ると、彼がそのようなネットワークを私利私欲のために利用するようなことはなかったことも事実である。そうであったとしても、シューアルにとっても親族⁽⁸⁷⁾とのつながりが子どもを育てる上で多くの支援となっていたことも否定できない。

最後に、共同体とのつながりも注目に値する。特にこのことが顕著なのは出産のときに繰り上げられる女性たちの絆である。当時の習慣のとおり、たとえばシューアルとハンナにとって最初の子どもが生まれるときには、出産する部屋にはハンナのほかにハンナの母と産婆が付き添い、出産と前後して乳母や友人の女性たちが駆けつけた。一方、シューアルは子どもの誕生まで別室で義父とともに待たなければならなかった。出産の後にはハンナと立ち会った女性たちとがともにお祝いの食事をした。この点についてヤザワは、出産による社会的つながりは出産を終えた母親と付き添った者たちがともに食事をすることによって完成すると述べている。このようにシューアルとハンナにとっても、出産は多くの熟練した女性たちの助けと立会いのもとに行われる、まさに共同体における出来事であったのである。⁽⁸⁸⁾

7 おわりに

植民地期ニューイングランドにおけるピューリタン家族の多産と相関関係にある諸要因を解明するために、結婚、人口、子ども、人々の絆という四つの観点から論考してきた。以上の考察から明らかになった点に基づき、特に多産と相関関係にあると思われる重要な要因を三点指摘する。

第一に、ピューリタンの親たちの間には、「子どもを産むこと」に関して明確な意味づけがあったことが挙げられる。ピューリタンにとって、多産は「神からの祝福」であるという明確な理解があった。これは乳幼児の高い死亡率という問題と母親の健康を損ねたり場合によっては命の危険にもつながるという生死の事実と裏腹であった。だからこそ、多くの子どもや孫の成長を見ることができるということは、まさに神の祝福であると信じられていたのである。冒頭で言及したジュディスはその意味で神によって祝福された女性であった。この「神からの祝福としての多産」という見解の背後には、出産というエバの呪いと死の危険を通して神の祝福に至るというピューリタンの信仰理解があったことも見逃すことができない。このように、ピューリタ

ン家族においては、多産の背後には子どもを産むことに対する明確で積極的な意味づけ、特に女性のアイデンティティに深く関わる意味でのピューリタンの価値体系に基づく意味づけがあったと考えられる。

第二に、ピューリタンの結婚観の多義性が挙げられる。換言すれば、前述の「神の祝福」として「子どもを産むこと」は、結婚における単独の目的ではなく、他の目的と共存していたということである。多産という観点から見ると、イギリス国教会の伝統から引き継いだピューリタンの結婚の目的のひとつである「嫡出子の出産」は、結婚の唯一の目的ではなく、その他にも「姦淫の防止」そして夫婦愛という「精神的な親密さ」という目的との関連の中で位置づけられているものであった。その意味で、ピューリタン家族の多産という状況は、「子どもを産むこと」の重要性に対する意味づけがなされる一方で、それが結婚におけるその他の重要な諸要因によって補強されるかたちで実現に至るものであったことを示唆している。

第三に、ピューリタン家族は、家族を支える人々の絆すなわちコミュニティの中で生きていた。たとえばニューイングランドの徒弟や住み込みの実施を見ると、子どもの教育や職業訓練が親のみの責任として意識されていたのではなく、親類や知人のネットワークの中でその機能が分担されていたと見ることができる。勿論、親が第一かつ最終の責任者であることに変わりはなく、しかも親と子の心の絆は子どもが見習いに出た後にも保たれていた。また出産も、現在のように妊婦（とその夫）が最新の機器がそろった清潔な分娩室の中で、専門の知識と技術を身につけた医師や看護婦の下で出産する状況とは程遠いものであった。ピューリタンの女性の出産は、経験を積んだ多くの女性たちが励まし、援助し、見守る中で、子どもの誕生を皆で迎え、喜び、祝うものであった。子どもの誕生から成長に至る苦楽をともにする人々の絆が、子どもを産み育てる決意をし、それを実行に移すための大きな支えとなっていたのではないだろうか。このように、ピューリタン家族にとっては、出産も子育てもコミュニティにおける出来事として人々の絆の中で営まれるものという性格を色濃くもっていた。

その他にも、結婚年齢の問題や避妊に関する知識と実践の問題もピューリタン家族の多産と関連があると考えられるが、これらの点に関する詳細な考察と評価は別の機会に譲ることとする。

注

- (1) Laurel Thatcher Ulrich, *Good Wives : Image and Reality in the Lives of Women in Northern New England 1650-1750* (New York : Vintage Books, 1982), 146.
- (2) Ulrich, 148.
- (3) トマス・ロバート・マルサス『人口論』永井義雄訳、水田洋編『世界の名著 41 パーク マルサス』(中央公論社、1980年)、451～455頁。John Demos, *A Little Commonwealth : Family Life in Plymouth Colony* (New York : Oxford University Press, 1970), 62. たとえば、結婚した兄弟たちは決して同一の世帯に住むことがなかった点をデモスは挙げている。Demos, 63.
- (4) Edmund S. Morgan, *The Puritan Family : Religion and Domestic Relations in Seventeenth-Century New England*, Revised Ed. (New York : Harper & Collins, 1966), 3.
- (5) シュアールの名前は、訳者によってシュアールまたはスーウルと表記されることがある。植民地期ニューイングランドの家族と子どもと学校の関係についての文献研究には、森田尚人「歴史のなかの子ども・家族・学校——アメリカ植民地期の経験から」『社会史のなかの子ども』宮澤康人編(新曜社、1988年、155～224頁)がある。
- (6) 日本におけるアメリカ植民地期研究の動向については、以下を参照。「日本における植民地社会の研究」『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第16号、1993年、20～71頁。
- (7) マルサス、451～454頁。
- (8) Steven Mintz and Susan Kellogg, *Domestic Revolutions : A Social History of American Family Life* (New York : The Free Press, 1988), 12.
- (9) Mary Beth Norton, *Founding Mothers and Fathers : Gendered Power and the Forming of American Society* (New York : Vintage Books, 1996), 222.
- (10) Ulrich, 139.
- (11) サミュエル・シュアール「サミュエル・シュアールの日記」大下尚一訳『ピューリタニズム』斎藤真・大橋健三郎・本間長世・亀井俊介編(研究社、1976年)、236頁。
- (12) Philip J. Greven, *The Protestant Temperament : Patterns of Child-Rearing, Religious Experience, and the Self in Early America* (New York : Knopf, 1977), 153, 157, 159-160. Mintz and Kellogg, 2-4.

- (13) リンダ・A・ポロック『忘れられた子どもたち——1500～1900年の親子関係』中地克子訳（勁草書房、1988年）、85、98、127、128、147、148、182、202、207、280、292、293、296、297、301-302、305、307、315、326、333、345、346、366頁。なお、邦訳303～304頁の「ジョセリンとロヴェルが離乳期の子どもを気がかりに思っていたことは、すでに述べた通りである」と訳されたところは、原文では“Josselin's and Sewall's concern for their children at weaning has already been noted.” (p. 221) となっており、訳し間違いであると思われる。したがって邦訳も「ジョセリンとスーウル（シュアール）」と訂正する必要がある。原文は、Linda A. Pollock, *Forgotten Children: Parent-Child Relations from 1500 to 1900* (New York: Cambridge University Press, 1983), 221.
- (14) 「サミュエル・シュアールの日記」『ピューリタニズム』、236～256頁。Thomas, M. Halsey, ed. *The Diary of Samuel Sewall, 1674-1729*. 2 vols. (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1973). Mel Yazawa, *The Diary and Life of Samuel Sewall* (New York: Bedford Books, 1998).
- (15) Ola E. Winslow, *Samuel Sewall of Boston* (New York: Macmillan, 1964). T. B. Strandness, *Samuel Sewall: A Puritan Portrait* (East Lansing: Michigan State University Press, 1967). Judith S. Graham, *Puritan Family Life: The Diary of Samuel Sewall* (Boston, Massachusetts: Northeastern University Press, 2000). なお、グラハムの研究に対しては、シュアールの日記を注意深く分析している一方で、その再構成の仕方が生の体験を十分に汲み取っていないという批評がある。Melvin Yazawa, “Puritan Family Life: The Diary of Samuel Sewall,” *Journal of American History* 88, no. 1 (June 2001): 181-182.
- (16) L. ストーン『家族・性・結婚の社会史——1500～1800年のイギリス』北本正章訳（勁草書房、1991年）、109～110頁。なお、この時期に結婚の目的として夫婦愛が補足されたことは、シュッキングによっても指摘されている。レヴィン・シュッキング『読書と市民的家族の形成——ピューリタニズムの家族観』（恒星社厚生閣、1995年）、29頁。
- (17) シュッキング、31～32頁。
- (18) Morgan, 47-52. Yazawa, *The Diary and Life of Samuel Sewall*, 3.
- (19) Morgan, 53.
- (20) Morgan, 34.
- (21) Demos, 95.
- (22) Morgan, 41-42.
- (23) Morgan, 39.

- (24) Morgan, 55-56. Lisa Wilson, *Ye Heart of a Man: The Democratic Life of Men in Colonial New England* (New Haven, CT: Yale University Press, 1999), 45, 55.
- (25) Wilson, 58, 62.
- (26) Morgan, 56-57. 両家の具体的な交渉の例については、81~82 頁を参照のこと。さらにデモスも、求婚中のある段階から、親が直接的に関わってくることを指摘している。Demos, 154 ff.
- (27) Morgan, 82-83.
- (28) E. Anthony Rotundo, "American Fatherhood: A Historical Perspective," *American Behavioral Scientist* 29, no. 1 (1985): 7-23; Elizabeth H. Pleck and Joseph H. Pleck, "Fatherhood Ideals in the United States: Historical Dimensions," in *The Role of the Father in Child Development*, 3d ed. Edited by Michael E. Lamb (New York: John Wiley & Sons, 1997): 33-48.
- (29) Ulrich, 7. ブラックストン『英法釈義』の引用も同書による。
- (30) Morgan, 42. ストーン、159 頁も参照。
- (31) Morgan, 19, 26, 43-46. Ulrich, 108. またストーンは、プロテスタントによる夫婦愛の強調が、妻の従属を逆説的に助長したと指摘している。ストーン、167、172~173 頁。シュッキング、40、43 頁も参照。さらに明石は、この時代の女性の地位に関して、自律性と自己主張に熱心な多くの女性が登場したという見方と、女性は服従が義務とされていたという見方の、二つの相対立する解釈があることを指摘している。明石紀雄「植民地時代および革命期アメリカにおける性役割」アメリカ学会『アメリカ研究』第 17 号、1983 年、5 頁。
- (32) Wilson, 3, 75. 植民地期ニューイングランドにおける父子関係の多義性については、篠原明「アメリカ植民地期ニュー・イングランドにおける父子関係の多義性——ジョナサン・エドワーズの手紙の分析を中心に——」比較家族史学会『比較家族史研究』第 18 号、2003 年 3 月、1~24 頁を参照のこと。
- (33) 藤本茂生『アメリカ史の中の子ども』（彩流社、2002 年）、82 頁。
- (34) Graham, 25, 29-30. 実際のシューアルによる日記の記載は、Halsey, ed. *The Diary of Samuel Sewall*, I: 184-185 を参照。Winslow, 53-54, 99, 169-171.
- (35) Graham, 26-27.
- (36) Graham, 30. Halsey, ed. *The Diary of Samuel Sewall*, I: 496.
- (37) Graham, 167. Mintz and Kellogg, 3.

- (38) ストーン、33、62、558 頁。
- (39) 総数 750 人の資料によるデモスの集計。Demos, 151, 193。その一方で和田は、植民地期アメリカのタバコ植民地メリーランドにおける、移民女性の晩婚傾向と、ネイティブ女性の早婚傾向を指摘し、男性にも同種の傾向が見られると述べている。ところが、18 世紀になるとこの地でも晩婚化の傾向が見られるようになる。和田光弘「17・18 世紀/北米タバコ植民地における人口と家族」『近代ヨーロッパの探求 2 家族』若尾祐司編著（ミネルヴァ書房、1998 年）、92～93 頁。
- (40) Wilson, 46.
- (41) Ulrich, 122. Mintz and Kellogg, 43-45.
- (42) ストーン、43～45 頁。さらにストーンは、出産間隔の平均は 24 から 30 ヶ月の間であったと述べている。ストーン、45 頁。
- (43) ピーター・ラスレット『われら失いし世界——近代イギリス社会史』川北稔・指昭博・山本正訳（三峰書房、1986 年）、157～158 頁。
- (44) ラスレット、159～160 頁。
- (45) 山本周二『ピューリタン神権政治——初期のアメリカ植民地の実像——』（九州大学出版会、2002 年）、19～20 頁。
- (46) Demos, 68, 192.
- (47) 藤本、44 頁。その一方で和田は、南部のタバコ植民地、特にメリーランド植民地では、移民女性の晩婚化とそれに伴う出生数の相対的低さ、および現地で生まれ育ったネイティブ女性の早婚と多産の傾向が見られると指摘している。たとえば、メリーランド植民地サマセット郡のデータを用いたメナードの推計に依拠して、「ネイティブ女性の平均出生児数が 6.0 人、20 歳までの子どもの死亡数が 2.8 人、差し引き 3.2 人であるのに対して、移民女性は同じく、3.9 人、1.6 人、2.3 人とされている」と述べている。和田、76～79 頁。
- (48) Ulrich, 159-163.
- (49) 佐藤哲也「Godly Mother——ピューリタン家族の母親像——」『兵庫教育大学研究紀要』第 17 巻、第一分冊、1997 年、131～132 頁。
- (50) ストーン、48 頁。
- (51) ポロク、167 頁。
- (52) ラスレット、153 頁。さらにラスレットは、イギリスにおける幼児死亡率が他のヨーロッパ諸国に比べて目立って低い大きな理由は、母乳による育児が一般的であった事実によると主張している。ラスレット、160 頁。
- (53) Demos, 66.
- (54) Demos, 132.

- (55) David E. Stannard, *The Puritan Way of Death: A Study in Religion, Culture, and Social Change* (New York: Oxford University Press, 1977), 54-55.
- (56) Graham, 20, 24, 168.
- (57) Graham, 20, 47.
- (58) Graham, 95-96.
- (59) Graham, 40-41, 102.
- (60) ポロク、131 頁。
- (61) 藤本、46 頁。
- (62) Stannard, 49.
- (63) ストーン、142~144 頁。さらに藤本、46 頁参照。
- (64) ポロク、132、273 頁。Stannard, 51-52, 59. Graham, 74-75. コトン・マザーの体罰に関する見解については、モーガンはマザーの「地獄に落ちるより、鞭で打ったほうがいい」ということばを引用し、ピューリタンのしつけが過度に厳しかったと見ている。その一方でモーガンは、シェーアルに言及しながら、17 世紀の親が現代の親よりも頻繁に鞭を使っていたことを示す証拠は何もないとも述べている。Morgan, 103。さらに、子どもに対する無関心と乱暴という見解に対する批判は、ラスレット、162 頁も参照のこと。
- (65) 「怒りの子たち」と「契約の子たち」という子どもの二重表現を、シェーアルの息子ジョゼフが使っている。Graham, 202。さらに、原罪観と子どもの教育との関係について、17 世紀中葉のフランスにおけるポール・ロワイヤルの「小さな学校」での理論と実践については、篠原「ポール・ロワイヤルの『小さな学校』に見る『恩寵』と『脱一恩寵』の子ども観——近代教育観成立過程研究序説——」東京学芸大学教育学研究科『教育学研究年報』第 10 号、1991 年 10 月、1~16 頁を参照のこと。
- (66) Greven, 153, 157, 159-160. Graham, 4, 34, 62, 68-74, 222. ポロク、85 頁。シェーアルがジョゼフに体罰を与えた日記箇所は、Halsey, ed. *The Diary of Samuel Sewall*, I: 300.
- (67) Graham, 68. Halsey, ed. *The Diary of Samuel Sewall*, I: 249.
- (68) ストーン、559 頁。
- (69) ストーン、356~358 頁。
- (70) ポロク、296 頁。
- (71) Ulrich, 138。ポロク、291~324 頁。特に 292 と 296 頁。
- (72) 佐藤、132 頁。
- (73) Wilson, 132. Morgan, 87-88, 92, 136-137. このように主人は自分の子ど

もと徒弟の両方に技術に加えて読み書きや信仰の基礎も教えなければならなかったことから、デモスは、植民地時代の家族生活において、自分の生んだ子どもと同世代の徒弟の間には区別がほとんどなされていなかったのではないかと解釈している。Demos, 108.

- (74) Wilson, 115-139.
- (75) ラスレット、3、9、97 頁。
- (76) Demos, 64-68. 町の総人口に占める子どもの割合が 54% という数字は、今日の日本と比べてみるとその高さがわかる。総務省がまとめた 2004 年 4 月 1 日現在の日本の総人口に占める 15 歳未満の子どもの割合は、13.9% であった。朝日新聞、2004 年 5 月 5 日朝刊。
- (77) Ulrich, 44, 57.
- (78) Morgan, 76-77. Demos, 74.
- (79) Demos, 182-184. Wilson, 1-2.
- (80) Demos, 118-121.
- (81) Ulrich, 141-144.
- (82) ストーン、559 頁。
- (83) Demos, 100-101, 184. Wilson, 88, 92-99, 106, 114.
- (84) Ulrich, 51-67, 131. Wilson, 83. Norton, 222-23. その一方で、19 世紀には産婆が減少していったことをウルリッチは指摘している。その理由として、単に産医学の発達のみならず、伝統的な社会関係の衰退と、家族の私事化の増加を挙げている。Ulrich, 134.
- (85) Graham, 181-194. Mintz and Kellogg, 3.
- (86) Graham, 131, 134, 157, 165-166, 223.
- (87) Graham, 156-162, 223.
- (88) Graham, 36-37, 48. Yazawa ed. *The Diary and Life of Samuel Sewall*, 9-10.

(群馬県立渋川青翠高校 教育思想史・父性の歴史)